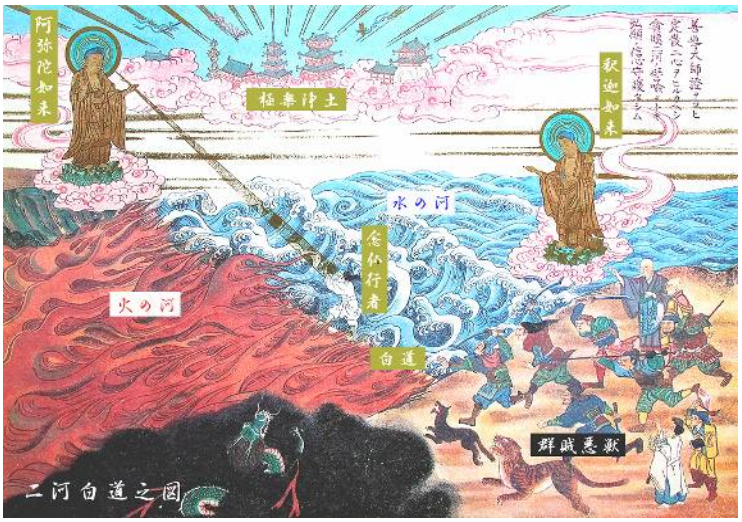
# 安楽寺だより

第 37 号

## 明けましておめでとうございます




## 二河白道のたとえその⑩

この人すでに此に遣わし、かしこに喚(よぼ)うを聞きて、すなわち自ら正しく身心に当たりて、決定して道を尋ねて直ちに進みて、疑怯退心(ぎこうたいしん)を生ぜずして、・・・

紙面内容

２面　「御正忌報恩講を終えて」若院
３面　東本願寺報恩講法要に参拝
４面　日本仏教史（補足）平安時代

編集・発行　安楽寺住職　吉田　和良
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
電話　〇五二（八四一）二六〇六

# 釈尊と阿弥陀如来の声を聞き
# 白道を歩むわが身を賜る

親鸞聖人が大切にされた、善導大師の「二河白道のたとえ」のお話しは、東岸から「この白道を行きなさい」とのお釈迦さまの勧める声に続き、西岸から「この道を歩んで来なさい」との阿弥陀さまの呼ぶ声を聞きます。

ものの道理が判らない、つまり私自身が判らない、何処に向かって歩んでいるのか判らない無明の闇をさまよう旅人に向かって、お釈迦さまは「**あなた自身を照らしてくださる教えに出会ってください**」と申されます。そして、阿弥陀さまが「**あなたのあるがままを照らしてくださる白道を歩んでください**」と、呼びかけられる声を旅人はしっかり聴きます。

お釈迦さまの『発遣』と阿弥陀さまの『招喚』を聞いた旅人は「すなわち自ら正しく身心に当たりて、決定して道を尋ねて、直ちに進みて」と語ります。この言葉は旅人が「**自分は凡夫の身であること**」に気づく、その自覚こそが「**阿弥陀さまのご本願に深くうなづくことができるわたしであります**」と気付いたことを表します。

釈尊と阿弥陀如来の呼びかけは、ひとつになって、旅人の身心に響いてまいります。その響きの中に、お浄土から旅人に向かってひとすじの白道が開かれています。

『疑怯退心を生ぜず』とは、二尊の呼びかけの中を歩む旅人には、なんら疑いも怯えもなく、後戻りする必要もありません。なぜなら境遇がいかようであれ、ひとすじの白道を歩む私自身をすでに賜っているからであります。

# 二〇一九年 御正忌報恩講を終えて

若院　吉田昌史

昨年十一月二十一日より二十八日までの八日間にわたり、京都の東本願寺で親鸞聖人の御命日を機縁（きえん）とする報恩講が勤まりました。平年より暖かく、御影堂の扉が開いていても、冷たい風を感じる時間が少なかったように思います。

浄土真宗では「真宗門徒の一年は、報恩講に始まり報恩講に終わる」という言葉があるように、先人たちから今に至るまで、最も大事にしてきたお勤めであります。

## 「報恩講に始まり　報恩講に終わる」

今回、准堂衆として外陣（げじん）でお勤めをさせていただきました。初めての報恩講参勤でしたので、期待や不安など色々な気持ちが入り混じる中、最後の坂東曲まで無事勤め上げることができました。

特に二十八日の御満座（ごまんざ）の坂東曲は、参詣の方で御影堂が埋め尽くされていました。

二〇二〇年の六月をもって、大谷暢顯(おおたにちょうけん)御門首が門首の位を辞されるご意志を示されました。ですので、この二〇一九年の報恩講が御門首としての最後の報恩講であると思うと、感慨深いものがありました。

二〇二〇年も十一月二十一日より、新しい御門首のもと、東本願寺で勤まる予定で御座います。お時間がありましたら紅葉も丁度いい季節ですので、是非お参りにお出かけください。

報恩講坂東曲のお勤め

# 本山東本願寺報恩講に参拝

昨年十一月二十五日、二十二組の寺院・ご門徒九〇名の皆様と、バス三台に分乗して、本山東本願寺報恩講に参拝いたしました。曇り空でしたが風もなく、参拝日和でした。

本山正面は他の団参バスがいっぱいで、御影堂西側でバスを降り、御影堂前の白州で参拝記念の写真撮影をいたしました。

本山御影堂前で参拝記念写真

昨年五月に国の重要文化財の指定を受けた御影堂ですが、何よりも全国のご門徒の皆様の願いを結集された建物との思いを強くしました。

その後、親鸞聖人の御影の前に座って、静かにお参りしました。堂内には御堂衆のお勤めの声が響き渡って、聖人の呼びかけのようでした。

## 堂内に響き渡る御堂衆のお勤め

二十五日は中日中（中日の午前）のお勤めで、雅楽が始まり今年七月からご門首になられる大谷暢裕師が、登高座で「報恩講式・歎徳文（親鸞聖人の遺徳・生涯を述べたお書物）を拝読されました。若院が准堂衆として外陣出仕して一時間三〇分のお勤めをしました（**2面参照**）

参拝後、ホテル平安の森京都で昼食をいただき、平安時代から京都の台所として賑わう錦市場（中京区富小路通四条）へ観光とお買い物に行きました。

今回、本山報恩講にご参加されました皆様に厚くお礼申し上げます。来年の報恩講にもご参拝されますよう、宜しくお願いいたします

# 帰敬式を行いました

昨年の報恩講には、多数のご門徒の皆様にご参詣をいただき、誠にありがとうございました。報恩講前日の十二日午後に帰敬式を執行いたしました。今回は四名のご門徒の皆様に安楽寺会館法要室で受式していただきました。

全員で「三帰依文（仏・法・僧の三宝に帰依するお聖教のことば）を唱和した後、剃刀（おかみそり）の式を行ない、お一人づつに法名を伝達しました。受式者を代表して竹田さんから「誓いのことば」をいただき、全員で正信偈をお勤めして、式を終えました。来年も執り行う予定ですので、ご希望される皆様はお申し出ください。

# 仏教豆知識

第三十七回

# 日本仏教史

## 補足①平安時代

日本の仏教史で輝かしい功績をあげた人に、最澄と空海がいます。二人とも奈良・東大寺で出家・得度を受け、唐の国で教学を学び、日本に帰ってから仏教の大改革に取り組みました。

東大寺・興福寺・薬師寺などの奈良南都六宗は、国家の保護を受け繁栄を遂げましたが、国の一機関としての律令仏教で、逆に国の政治や財政に大きな影響を与え、混乱が増すようになりました。

七九四年（延暦十三年）桓武天皇は平安京に遷都し、寺院の保護政策を大転換させました。

この時代に登場したのが、最澄と空海でした。最澄は、比叡山で厳しい修行をして天台教学の研究に励み、八〇六年（延暦二十五年）日本天台宗を開きました。その後、「山家学生式」を制定して大乗戒壇（得度・受戒）の設立を目指しました。「山家学生式」とは、日本仏教で最初の教団独自の僧尼規制といえます。このことは南都仏教の強い反対を受けましたが、最澄は、仏教教団の主体制・自主性の確立のため、奮闘されました。

八二二年（弘仁十三年）最澄は五十六歳で没しましたが、その七日後に大乗戒壇建立の勅許が下り、生涯をかけた悲願は達成され、翌年に「延暦寺」の寺号が授けられました。これは、日本の仏教史の上で、極めて重要な意義があります。

伝教大師　最澄

数年前、神奈川県相模原市の障がい者施設で、何人もの入所者が殺害されるという大変痛ましい事件があり、今年一月に裁判が始まりました。その犯人は「障がい者は生きている意味がない」と発言していました。この言葉は、特異な価値基準であり、他者が自分勝手なものさしで評価してしまっているのではないでしょうか▼障がいがあるひとは、不自由なことがいっぱいあると思いますが、それを支えてくれる人が周りにたくさんいます。その支えられているという実感が、障がいをかかえる人たちにとっては、「いのちの尊さに目覚める」ことにつながっているのだと思います▼「いのちの尊さ」の価値は、他者が評価するものではなく、一人ひとりが自らの内に自覚され、そして自分らしく「あるがまま」に生きていること、言葉を変えればどんな境遇であっても、本当に生きている「尊さ」に気づいていくことができるかどうかが大事だと思います▼他人から見たら「尊い」と思われなくても、自分らしく生きていく道を見つけられているのなら「尊い」と言えるのではないでしょうか。